

## 村落の境界とその空間構造に関する一考察

——京都市北区雲ヶ畠を事例として——

松 岡 健\*

### I. はじめに

これまで多くの地理学者らによって指摘されてきたように、われわれの周りには、国境や県境と異なる精神的な境界がある<sup>1)</sup>。本稿の目的は、さまざまな境界について、一つの分類、解釈を試みることである。

英国の人類学者、エドマンド・リーチによれば、境界とは「自然のままで連続していく切れ目のないところに切れ目をわざと入れた人工的な分断で」<sup>2)</sup>あるという。われわれが分類という作業をすることなしに「世界」を理解できないことを考えると、境界はわれわれの認識そのものにも深くかかわっていると言える。境界は、極めて広範な領域にわたる概念であるが、ここでは空間的な境界に限定することによって、地理学側からのアプローチを試みたい。地理学の基礎概念である「地域」も、境界に縁どられることによって初めて、その存在が明確になると言えよう<sup>3)</sup>。

さて、境界にはもう一つ重要な性質がある。それは、境界の両義性、周縁性である。境界が異なる二種のものを区分するなら、境界そのものは当然両者の性質を合わせ持つことになる。そして境界は、双方のカテゴリーの中心に対して最も離れた位置に存在するため、

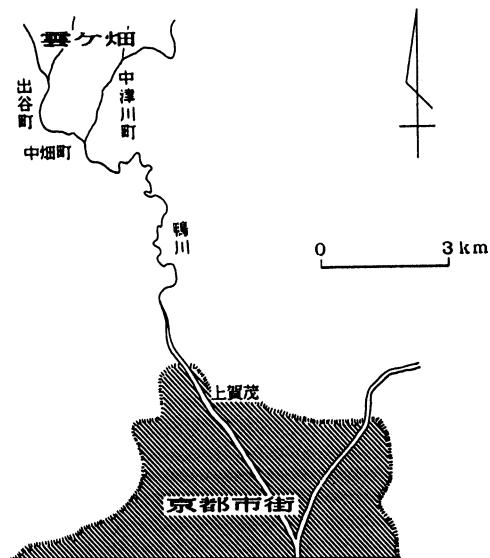
周縁性を持ち、「中心部分を生氣づけ」<sup>4)</sup>の役割りを果たす。境界は区分のための装置であるだけでなく、その存在自体に多くの問題を持つ概念である。地理学的に言うならば、境界は単なる地域区分の道具として利用されるばかりではなく、境界そのものの空間、場所が独自に問題となるような存在だということである。

これらの認識を踏まえた上で、本研究では日本の伝統的村落を対象とし、ムラの境界とその空間構造を考察することにしたい<sup>5)</sup>。具体的な調査地域としては、伝統的な集落形態や社会集団がよく保存されており、またその規模が適当であるという理由で、京都市北区雲ヶ畠を選んだ。

### II. 雲ヶ畠の概要

雲ヶ畠の歴史は古く、平安京が造営される以前から丹波国桑田郡山国郷の高所（または高谷）として名を残している<sup>6)</sup>。弘仁年間（810~824年）に山城国に編入され、葛野郡小野郷中津川村、中畠村、出谷村の雲ヶ畠三ヶ村となり、元禄10年（1697）に愛宕郡に移った。周辺の村々とは古代より小野山としてのまとまりがあり、近世前期までに小野郷十ヶ村の一つとなっていた<sup>7)</sup>。1874年に三ヶ村

\* 神戸新聞社



第1図 地域概観図

が合併して雲ヶ畠村が生まれた。そして1949年、京都市上京区に編入され、その後の再編をへて現在の京都市北区雲ヶ畠に至っている<sup>8)</sup>。

この集落は、賀茂川の上流にあたる雲ヶ畠川流域の山間部に位置する（第1図）。伝統的な形態を残す民家が川沿いに点在し、典型的な京都北山の集落の姿を見せていている。集落内には、中畠町、中津川町の産土神である嚴島神社（中畠町）、出谷町の産土神である惟喬神社（出谷町）、曹洞宗洞谷寺（中津川町）、臨済宗高雲寺（中畠町）、浄土宗福蔵院（出

谷町）などがある。1990年現在、世帯数は79戸、人口は298人である（第1表）。1960年以後は人口減少を続けている。また京都市街への通勤者は増えつつある。

### III. 空間的社会構造——祭祀を中心に

境界について考察するには、まず境界を認識し、それによって分けられる人間集団を明らかにする必要がある。ここでは、境のいわゆる「内」にあたる社会諸集団の配列形態を明らかにし、「村落の空間的社会構造」<sup>9)</sup>を示したい。

#### (1) 町と個町について

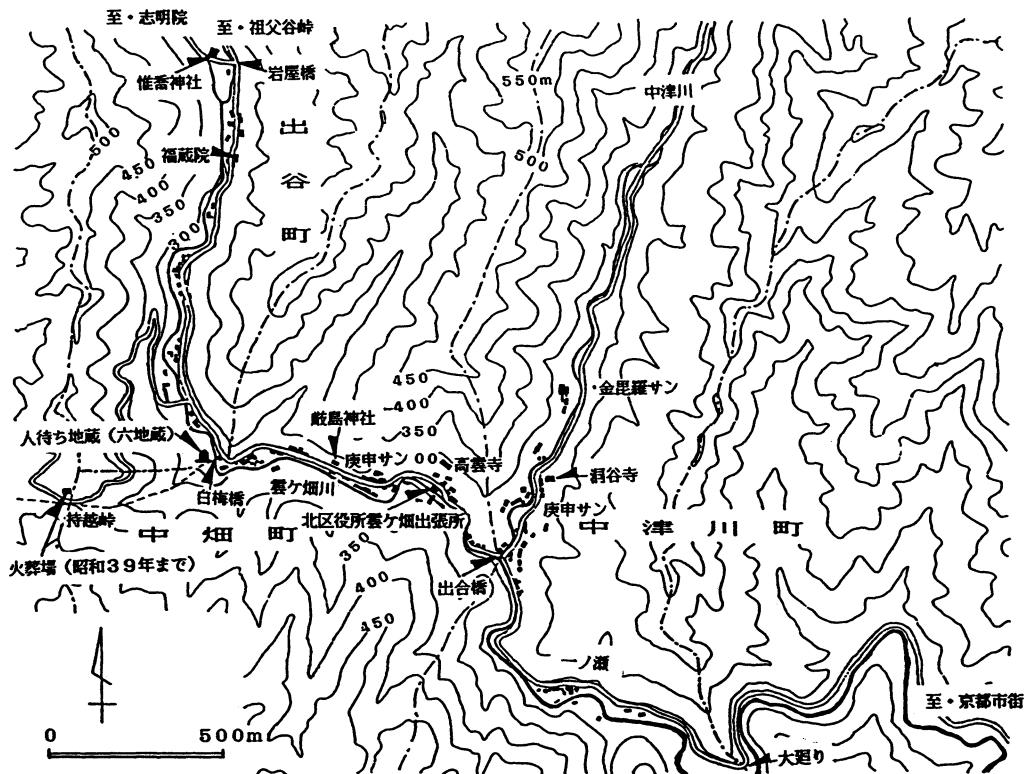
かつての行政村であり、現在でも小学校区その他の基礎的な単位である雲ヶ畠は、大きく3つの部分に分かれる。それらはかつて藩政村であったが、今は「町」と呼ばれている（第2図）。産土神については、嚴島神社と惟喬神社とがある。嚴島神社は近世以前より中畠町、中津川町双方の産土神であったが、中津川町には金毘羅大権現という小祠があり、全戸で金毘羅講を行うので、これが中津川町の準産土神的な存在であると考えられる。

また寺については第II章でも述べたように各町ごとに壇那寺がある。境内には各イエの墓が集められている<sup>10)</sup>。寺は各講が開かれる場所でもあり、宗教的な意味を越えて、町ご

第1表 雲ヶ畠における世帯数と人口

	明治8年 (1875)	昭和25年 (1950)	昭和30年 (1955)	昭和35年 (1960)	昭和40年 (1965)	昭和45年 (1970)	昭和50年 (1975)	昭和55年 (1980)	昭和61年 (1986)	平成2年 (1990)
世帯数	79戸	96戸	91戸	100戸	99戸	91戸	91戸	84戸	79戸	79戸
人口	443人	453人	474人	501人	453人	428人	390人	352人	320人	298人

出典：京都市役所統計資料『京都府地誌 愛宕郡村誌二』、京都府、1881。



第2図 雲ヶ畑概観図

とのまとまりの核となるものである。講は、信仰的行事であると同時に、共同の飲食などを伴う娛樂的な要素が強く、集団のまとまりを確認する場であると考えられる。

一方、町の下位の階層にあたる社会集団をなすのが個町である。7つある各個町は、空間的にほぼまとまった形で配列している。また、後述する虫送りなどの伝統行事が残っていた1955年の個町も復元したが、大きな違いは見られない（第3図、第4図）。

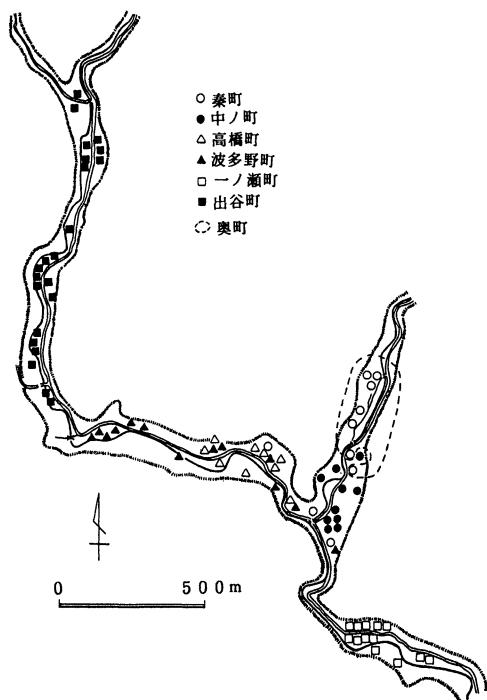
個町は大きくみて、姓名からなる同族集団と、地名からなる地縁集団とに二分される。前者は秦町、波多野町、高橋町で、後者は奥町、中ノ町、一ノ瀬町、出谷町である。しか

し、この2種の個町は機能的には同じで、葬式の手伝いをはじめ、生活の基本的な互助を行う単位（小地域集団）となっている。また同族集団と地縁集団が並存していると言っても、同族集団はほぼ地域的にまとまっており、地縁集団も同族を多く含んでいるので、両者は全く異なるわけではない。

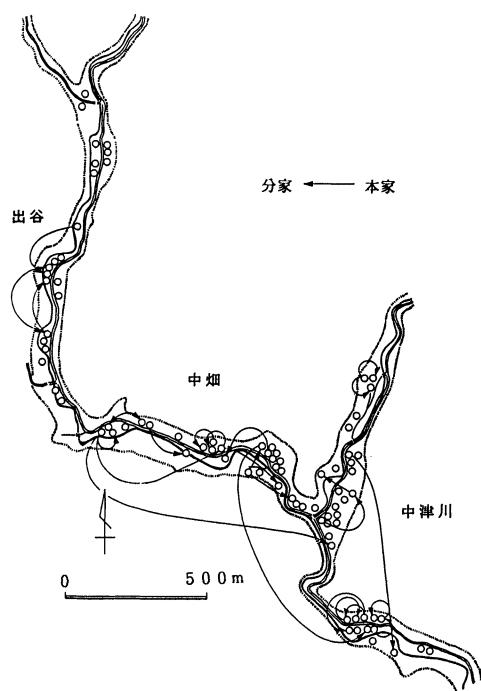
それぞれの個町には神社があり<sup>11)</sup>（奥町は全戸が秦町に含まれるので神社を持たない）、各種の講が開かれる。本一分家関係がほとんど個町内でおさまることからみても、その連帶の強さがうかがえる（第5図）。

## （2）空間的社会構造の析出

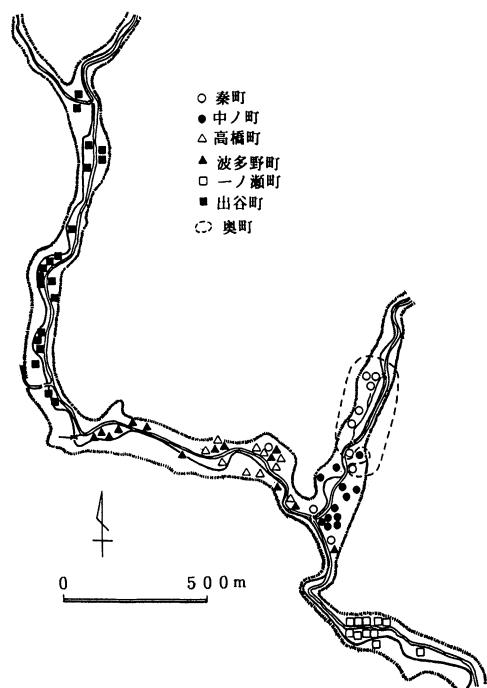
これまで見てきたように、雲ヶ畑には町一



第3図 個町を構成するイエ (1986年)



第5図 本・分家関係



第4図 個町を構成するイエ (1955年)

個町という社会集団が階層的に存在し、それぞれが空間的にある程度まとまった形態をとっている。次に、いわゆるムラがどの階層にあたるかということについて考えてみたい。

まず近世においては、現在の町が藩政村としての村を形成していること、また各村に寺社があることなどからみて、中津川町、中畠町、出谷町が、それぞれムラであったと思われる。しかし、近世文書、特に争論関係<sup>12)</sup>の文書名に「雲ヶ畠三ヶ村」と記されているものがかなり存在すること<sup>13)</sup>、元禄、天保の郷帳<sup>14)</sup>にある村名が「雲ヶ畠中畠村」のように雲ヶ畠を冠称していることなどからみて、これら雲ヶ畠三ヶ村は相互にかなり密接な関連があったと推定される。

次に近代以降であるが、近世の村を受け継ぐ町は、現在に至るまでまとまりを存続して

きた。それは、町および寺社が山（＝財産）を有していることからも裏付けられる。とはいって、1874年に三ヶ村が雲ヶ畠村として1つの行政単位となったことは、空間的社会構造にも大きな影響を与えた。行政村の範囲であること以外に、雲ヶ畠は小学校区<sup>15)</sup>、青年団、処女会などの各種団体の範囲として重要な意味を持つようになったのである。現在では農協を中心とした経済活動を含めて、雲ヶ畠全体で行う社会的活動が主である。以上のことから、ムラは近代になって雲ヶ畠の範囲にまで広がったと考えられる。

しかし、前述のようにムラ的な性格は、近世、近代以後を通じて中津川町、中畠町、出谷町の階層にも、雲ヶ畠全体の階層にも分有されており、相対的にどちらがムラとしての性格をより強く持っていたかという違いがあるに過ぎない、と理解しておくのが妥当であろう。

以上をまとめて、現在の雲ヶ畠における空間的社会構造を示したのが第6図である。図には、ムラ一町一個町の空間的、階層的構造が明確に表れていると言える。ただし、氏子

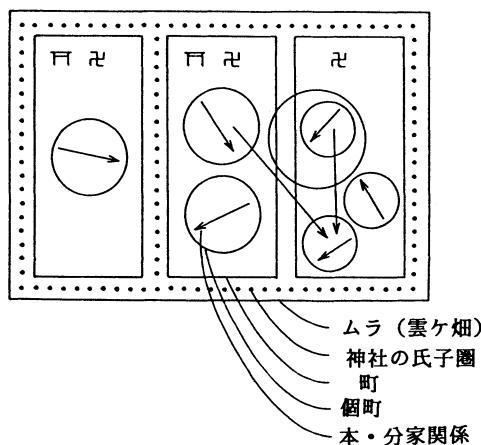
の範囲からすると、中津川町、中畠町と出谷町が大きく分かれるように見えるが、実際には中畠町と出谷町も松上げの行事<sup>16)</sup>や、後述する葬送儀礼において共通したものを持ち、中津川町と中畠町、出谷町という分割がなされる場合もあることを付け加えておきたい。

#### V. 境界の多次元性

すでに触れたように、行政界以外の境に注目し、境界を分類しようとする試みは、さまざまな分野でなされてきた。その代表的な例の一つとして、鳥越皓之<sup>17)</sup>のものが挙げられる。その分類は、地理的境界と社会的境界の二分法である。前者が地図で表示できるのに対して、後者は社会生活のうちから観念的に出てきたものであり、生活空間の範囲を象徴的に示すものだとされる。これは、多様な境界を明確に整理したものとして、画期的な説であったと言える。

ところが、境界をさらに厳密に検討していくと、どうしてもこの分類では不十分な点が出てくる。この点については、主に地理学の分野の研究によって明らかにされてきた。小口千明は、地理的境界を行政的村境、社会的境界を精神的ムラ境と読みかえている<sup>18)</sup>。ここでは、行政的村境も社会的境界の一種であることが指摘されている。

さらに、鳥越の分類にはもう一つ疑問点が挙げられる。それは、社会的境界が観念的、象徴的なものであり、地図化が不可能であるとしている点である。しかしながら、小口をはじめ、精神的ムラ境を地図化している研究例は多い。つまり、精神的ムラ境も、地理的境界の一種であるとみなしうるのである。す



第6図 雲ヶ畠の空間的社会構造

なわち、社会的境界（精神的ムラ境）もまた、具体的な場所性を持っている。このことを明確にすることによって、境界に対する地理学からのアプローチを可能にしたのが、「境の場所」の概念である。

八木康幸は、これまで村人の抽象的な世界観の確定材料としてしか扱われてこなかった境界を、地理学の立場からとらえ直し、「境の場所」という新たな分析概念を提唱した。それは、「物理的経験的な空間でありながら、日常の生活世界以外の世界への回路となったり、神靈あるいは魔性のものや災厄などとの間接的、直接的な交流を可能にしたりするという象徴的な機能」<sup>19)</sup>を持つ特別な場所のことである。また、「社会意識の基本構造は、内／外、村内／村外といった二元的枠組でとらえうるものであって、『境の場所』は、これらの秩序を再確認するものとして表象される」<sup>20)</sup>という点に関しては、社会的境界、精神的ムラ境とほぼ同義であると言える。しかし、「境の場所」は、境界を具体的な空間（場所）に即して理解しようとする点において、旧来の境界概念とは一線を画するものであると言えよう。

## V. 「境の場所」の諸相

本章では、前に述べた「境の場所」が、雲ヶ畠の中でどのように表出するかを考える。そこで、虫送り、葬送儀礼といった空間的な移動を含む伝統行事、寺社の位置など、「境の場所」が典型的に示されると思われる対象について、項目別に詳述したい。

### (1) 虫送り

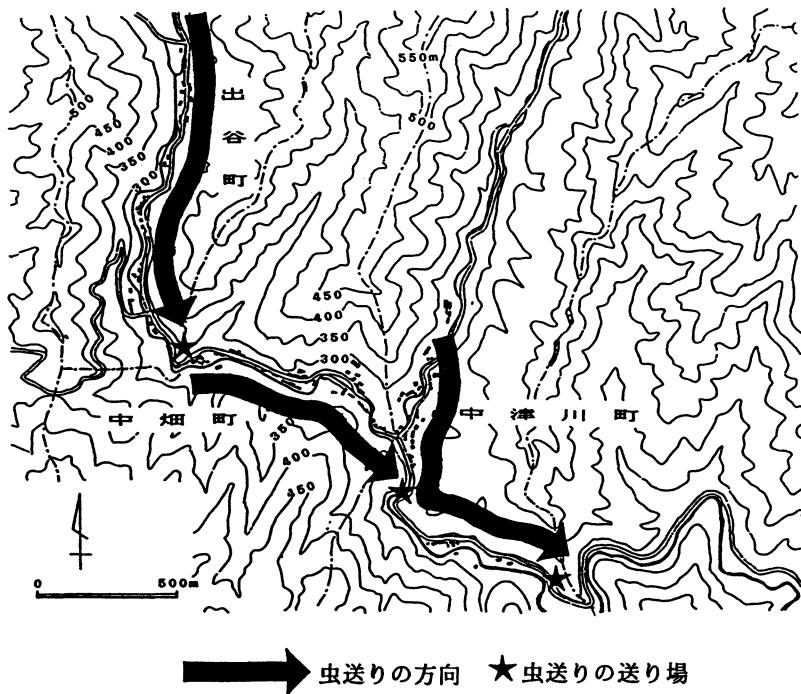
虫送りとは、農作の病虫害駆除のための呪

術的鎮送行事である。かね、太鼓を鳴らしつつ大声で叫び、あるいは松明を各自かざしつつ行列を作つて虫を送る<sup>21)</sup>。ムラ境に送られた虫は、「内」から駆除されるのである。

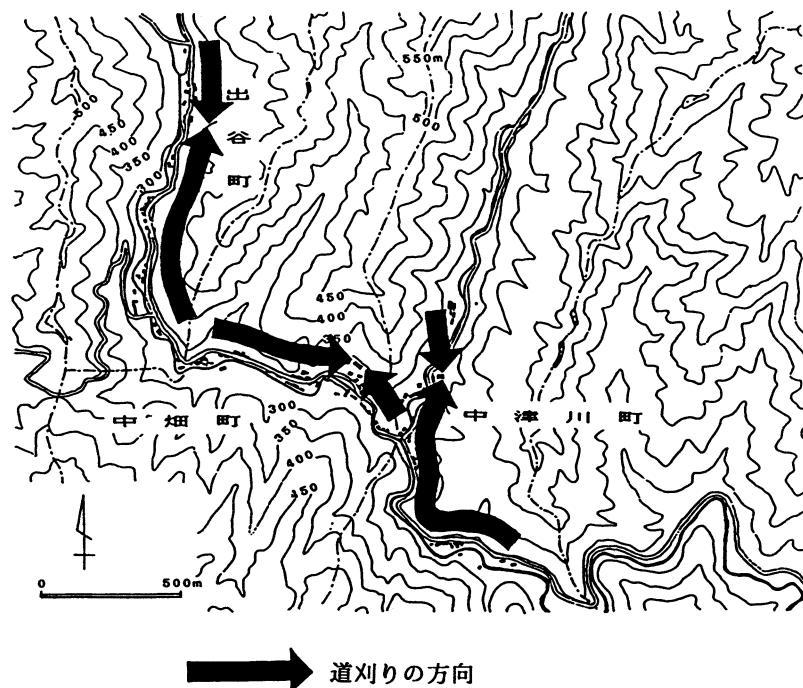
雲ヶ畠の虫送りは、昭和32～33年ごろまで全町で行われていた。7月の土用入りから3日目の、夜7時半から8時ごろに行事は始まる。各イエごとに松明を作り、かね、太鼓を鳴らしながら道を歩く。かつては、その時に「おくりば、おくりば、大根のおくりば」という歌がうたわれたらしいが、「おくりば」とは、「送り場」のことではないかと推測される<sup>22)</sup>。

この行事は町ごとに行われ、出谷町の端の惟喬神社の所から始まって、順に中畠町、中津川町へと虫が送られていく。その方向と送り場<sup>23)</sup>は、第7図に示されたとおりである。送り場は、白梅橋の脇の辻、出合橋の下で家がとぎれる場所、そして中津川町の集落と耕地がとぎれる場所の、計3ヶ所である。言うまでもなく、この3ヶ所は出谷町、中畠町、中津川町にとって、それぞれの送り場であり、「境の場所」であると言える。ただし、虫は順に受け継がれて外へ追い出されることから、最も下（京都市街側）の送り場は、中津川町だけのものではなく、ムラ全体の送り場の意味も含んでいると考えられる。

ここで注目したいのは、送り場と行政界とが必ずしも一致しないことである。中畠町の送り場が出合橋でないのは、送り場の上の所（中津川町内）に、中畠町に属するイエが分家して住んでいるという理由によるもので、かつては出合橋までであった可能性もある。これに対して、最も下の送り場は、明らかに現在の行政的境界や、旧雲ヶ畠村の境界（現



第7図 虫送りの方向と送り場



第8図 道刈りの方向

在の雲ヶ畠造林組合の管理範囲）とは異なっており、境界の多様性がそこから読み取れる。

ところで雲ヶ畠には、道刈りといって、虫送りと同じように道路上で行う行事がある。これは、通行が不便にならないよう草を刈る実用的な慣行である。興味深いのは、同じ道を移動するにもかかわらず、その方向が全く異なることである（第8図）。道刈りには「追い出す」という認識がないために、各自の家からムラのまん中に集まるという、能率的な方法が取られるのであろう。それに対して、虫送りには、「外へ追い出す」という認識が働く。虫送りの方向は、「内」から「外」への方向であると考えられる。

### (2) 葬送儀礼と地蔵

賀茂川は御所の用水源であったため、かつてその水源に位置する集落は、水を絶えず清浄に保つように規制された。したがって、賀茂川の上流部にあたる雲ヶ畠では、村内で火葬することは許されず、清滝川水系の真弓に遺体を持ち越さねばならなかつたのである<sup>24)</sup>。このため雲ヶ畠の火葬場<sup>25)</sup>は、峠を越えた西側に真弓の所有地を借りて設けられ、その峠は持越峠と呼ばれるようになった。

注目すべきことは、火葬場まで死者を送る儀礼である。どこかのイエに死者が出ると、通夜が行われ、個町の住人と近親者とが中心に集まる。そして死者は白梅橋の所まで葬列によって送られる。ここには人待ち地蔵（六地蔵）と呼ばれる7体の地蔵があり、この前で読経がなされるのである。葬列はそこまで帰り、その後は若中という町内の青年たちが、持越峠の火葬場まで運んだ。こうした雲ヶ畠の葬送儀礼は、昭和38年ごろまで行われていた。ただし、中津川町だけは少し異なり、

読経は寺で済まし、葬列は若中のみで組織され、地蔵の前では挨拶だけで通過したという。

地蔵がムラ境に祀られるものであることは、民俗学などでは定説化しており<sup>26)</sup>、その姿は「冥界とこの世を往来しつつ衆生済度に席の温まる間もない（中略）大慈悲心<sup>27)</sup>」を表現したものである。白梅橋の人待ち地蔵も、その儀礼、位置などからみて、「境の場所」の一つを形成していることは明らかであろう。この場所はムラの「内」と「外」、この場合はとくに、「この世」と「あの世」とを区切る意味を持っている。ただ、中津川町にはあまり関係のない場所であることから、中畠町、出谷町にとっての「境の場所」としておくのが妥当であろう。人待ち地蔵が中畠町と出谷町の境に存在することも、これと深い関係があるものと推測される。

### (3) 神社、寺（墓地）

雲ヶ畠の中で「境の場所」を明確に表象しているのは、以上で述べた虫送りと葬送儀礼であると考えられるが、同様の性格を持つと思われるものを、さらにいくつか挙げておきたい。

一つは神社である。厳島神社、惟喬神社は産土神であるが、どちらの境内にも大山祇神社が祀られており、その場所は山の神信仰の場ともなっている。千田稔は、山の神としての大山祇神社が両義的な性格を持ち、山と平野、自然と文化の中間地点に祀られる境界の神であると述べている<sup>28)</sup>。両神社と同様に、中津川町の金毘羅サンも、山に少し入ったところに祀られていること、かつて中津川町の山を守ったという伝承があることなどから、山の神としてとらえることができる。厳島神社は中畠町、中津川町にとっての、また惟喬

神社は出谷町にとっての「境の場所」とみなしうる。さらに、中ノ町、高橋町にある庚申サンも境の神であり<sup>29)</sup>、これらの個町にとっての「境の場所」と言えよう。

神社のほかに、「境の場所」としてもう一つ挙げられるのは寺である。寺のすぐ脇に位置する墓地は、死者との交流をする場所という意味で、「この世」と「あの世」との境界であると言える<sup>30)</sup>。したがって、雲ヶ畠における洞谷寺、高雲寺、福蔵院の3つの寺は、それぞれが中津川町、中畠町、出谷町にとっての「境の場所」であると考えられる。

ただし、ここで取り上げた神社、寺は「境の場所」としての性質を含んでいる、という程度に考えておきたい。

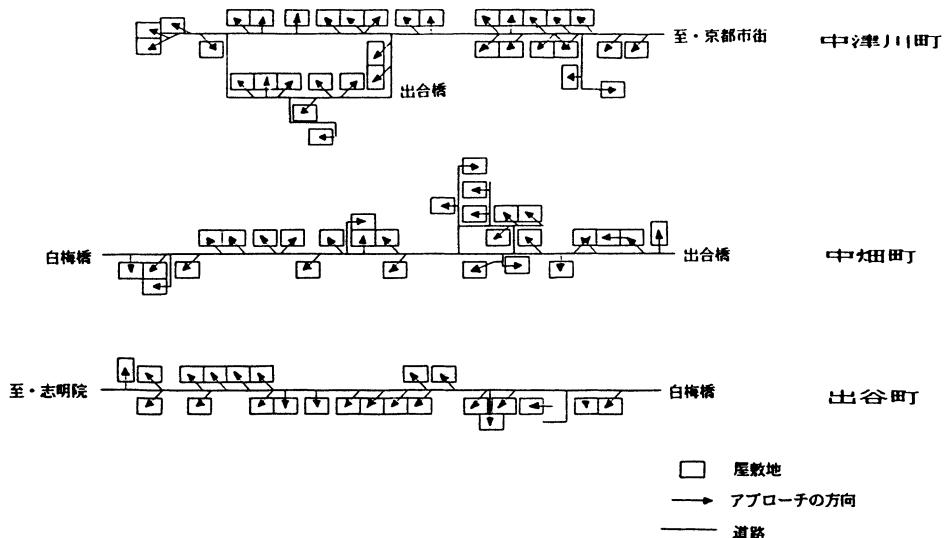
#### (4) 内一外の方向性

以上、雲ヶ畠における「境の場所」について述べてきたが、それはムラ、町、個町といった社会集団の「内」と「外」の相互主観的な意識によって支えられていると考えられる。

しかし、その「外」に対する意識とは、「内」からみて自己を中心に全く均等に働くものなのであろうか。

その点を検証するために、ここではムラの中にある個々のイエについて考察してみたい。第9図は各家屋へのアプローチの方向性を表わしたものである。アプローチとは、「道路・広場等の公共スペースから、個々の建物に至る取付け道路」<sup>31)</sup>のことを行う。川沿いの斜面に道路が通り、その上下に家屋が並ぶという形態を取る雲ヶ畠では、ほとんどの家に、屋敷地に入るための小さな坂道が設けられている。そこで、このアプローチを各イエにおける外一内の方向性を表すものと考えてみた。図では3方向の矢印で表示したが、「道から家屋に入る場合、どちらの方向から来た方が入りやすいか」ということを重視して分類した。

これを見ると、全体として明らかに京都市街を「外」にしていることが分かる。しかし



第9図 家屋へのアプローチの方向

これは予想されるべき結果である。すなわち、現実の経済的、文化的諸活動が京都市街で行われることから、この結果は、日常生活に関連するものと言える。しかし、ここで注目されるのは、これが虫送りの方向と見事に対応することである。虫送りは呪術的行為ではあるが、それは日常的な内一外の関係を背景に持っているとみなすことができる。

## VII. ムラの境界とその空間構造

### (1) 境界分類の試み

これまで多様な境界を取り上げてきたが、境界それぞれの関係はいまだ明確になっていない。そこで、空間的な境界の分類を次に試みた。

その結果は第2表に示されたとおりである。

**自然的境界**：物理的に存在する自然環境的な境界である。山陵、河川など、地形的な境がその代表的なものと言える。この境界は集団への属性に関係なく、だれにでも知覚できるものである。

**政治的境界**：この境界は地図上に見られる最も一般的な境界であり、境界内の集団と他の地域の集団との関係において成り立つものである。政治的な権力によって線引きされる場合もある。

**経済的境界**：財産としての土地の所有範囲にかかる境界である。意味する範囲は広く、村落に限っても、広大な入会林野から一戸ずつの屋敷地まで、多様なあり方を示す。政治的境界と一致することもあり、両境界の関連は非常に深いと言える。

**象徴的境界（「境の場所」）**：この境界は精

第2表 雲ヶ畑における境界の分類

境界	支持する集団	表 象	区分するもの
自然的境界	人類集団	尾根線、川筋、平地と山の接線など	地形
政治的境界	政治・行政界についての意識をもつ集団	道路標識など	行政の区域
経済的境界	土地の所有・管理についての意識をもつ集団	囲いなど	財産としての土地
象徴的境界 (境の場所)	雲ヶ畑に帰属する集団	虫送りの最も下の送り場	ムラの「内」と「外」 町の「内」と「外」 （「この世」と「あの世」） （「ムラ」と「ヤマ」） （「ケ」と「ハレ」） （「安心」と「不安」） （「秩序」と「混沌」）
	中畑町・出谷町に帰属する集団	人待ち地蔵	
	中畑町・中津川町に帰属する集団	嚴島神社	
	中津川町に帰属する集団	虫送りの最も下の送り場 金毘羅サン、洞谷寺	
	中畑町に帰属する集団	出合橋の下の送り場 高雲寺	
	出谷町に帰属する集団	白梅橋の辻の送り場 椎喬神社（大山祇神社）、福蔵院	
	奏町、中ノ町、一ノ瀬町、 波多野町、高橋町のそれ ぞれに帰属する集団	嚴島神社の小宮サン (八幡神社・稻荷神社・大山祇神社 ・天御中主神社) 庚申サン	

神的境界、社会的境界、民俗的境界などと呼ばれているものと、ほぼ同義である。境界内部の社会集団に支持されていること、つまり内一外の意識によって成立していることが特徴である。村落においては、社会集団が空間的一階層的に配列されているので、その境界も空間的一階層的に存在している。

ここで、象徴的境界と「境の場所」との違いについて触れておきたい。両者は同次元のものであり、ほぼ同じ意味である。しかし、象徴的境界とは、区分または分類することを強調する場合の概念、そして「境の場所」とは、両義性・周縁性を強調する場合の概念と区別しておく。ここであえて区別したのは、境界を論じる場合の混乱を防ぐためである。

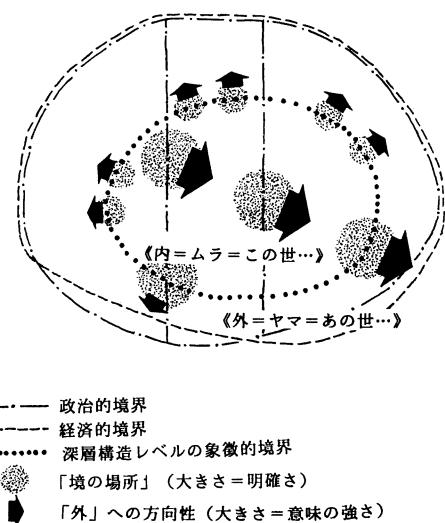
別の見方をすれば、象徴的境界は深層構造レベルのもの（言語でいう文法のようなもの）として、また「境の場所」はそれが実在化したもの（同じく、現実の発話行為のようなもの）としてとらえることができる。記号論的に考えるならば、前者がラング、後者がパロールにあたる。

さらに、仮説として提示しておきたいのが、象徴的境界が線的で、「境の場所」が点的であるという解釈である。虫送りの送り場や葬列の通る地蔵、あの世を思う墓地など、現実にある地点とその近傍が「境の場所」にあたる。そしてそれをもとに引き出される抽象的な概念（文法）が、象徴的境界というわけである。「境の場所」の立地候補地点の集合体が、象徴的境界であるとも言いかえられる。以上のことは、「村境は線か点か」という問題点を分析する際の、一つの糸口になると考えられる。

## (2) 雲ヶ畠の境界とその空間構造

V章でみた雲ヶ畠における境界を模式化したのが第10図である。ここでみられる「境の場所」は、その性質においてかなりの広がりを持つ。一方には地蔵、墓地などを媒介として、「あの世」と接するような境界があり、またもう一方には日常的な内一外の方向性を背景にすると思われる虫送りの送り場がある<sup>32)</sup>。後者の「境の場所」は、日常生活において、より濃密な意味を持つものであると言えよう。また、墓地などの境界性ももちろん無視できるものではないが、ここではさほど明確ではないと考えられる。

ここで、これら「境の場所」のムラの中ににおける位置をもう一度みてみたい。そこから言えることは、「境の場所」のほとんどが平地と山の自然的環境に位置することである。この場所は、象徴的な次元では「ムラ（内）」と「ヤマ（外）」の中間であると言うことができ、ムラ人にとっての空間秩序が具体的な場所をともなって表象したものと考えられる。



第10図 ムラの境界の空間構造

ここに象徴的境界と自然的境界との一致が見られるが、分類された4つの境界が空間的に一致することは、しばしば認められることである。

境界は多様で、かつ互いに複雑にからみ合っているが、その中でも象徴的境界は、内一外、この世—あの世、ムラ—ヤマ、安心—不安などの意味が幾重にも付加された、極めて多義的なものである。その線的な概念は、日常的にはあまり意識されていないが、虫送りや葬送儀礼が行われる時や、何か宗教施設を立地させる時などに、現実のものとして場所をともなって現れる。意味の強さや方向性も、この時不均等なものになる。雲ヶ畠では、日常生活において、京都市街を「外」とする方向性が強く働いているが、ときには他の「境の場所」も内一外の秩序を再確認させる場合がある。

## VII. おわりに

本稿では、人間にとてムラ境がどんな意味を持って存在するかについて考えてきた。具体的には、雲ヶ畠の事例を通して、境界が4つに分類できること、またその4つが複雑にからみ合っていることなどを指摘した。自然的境界や政治的境界に比べて、象徴的境界はあいまいでしかも多義的である。しかし、それは深層構造レベルのことであって、われわれの眼前には意味のある方向性を持った「境の場所」が存在する。それは、あくまで一つの立地をともなった実在であるとも言える。

境界は地理学に興味深いテーマを与えてくれる。空間や場所の意味に関して、厳密な説

明を試みるために、「人間の感情を理解し、様々な形態の経験を考慮に入れつつ、空間と場所を複雑な心象として理解するよう」<sup>33)</sup> 境界研究が、さらに積み重ねられるべきであると考える。

〔付記〕本稿は立命館大学文学部に提出した1986年度卒業論文を加筆、修正したものである。本稿の作成にあたり、現地でお世話をなった方に心から感謝いたします。なお本稿の一部は、同年度全国地理学専攻学生卒業論文発表大会で発表した。

## 注

- 1) ムラの境界に関する地理学、民俗学の研究動向については次の文献に要領よくまとめられている。浜谷正人『日本村落の社会地理』、古今書院、1988、56~63頁、八木康幸「村落空間論の諸相—象徴的空间を中心にして—」、関西学院史学22、1988、55~67頁、福田アジョ「村落空間論における領域と境界」、民俗フォーラム創刊号、1985、2~5頁。
- 2) リーチ著、青木・宮坂訳『文化とコミュニケーション』、紀伊国屋書店、1981、73頁。
- 3) 「『縁どるもの』の解明は、地理学の本質的課題にコミットする」水津一朗『景観の深層』、地人書房、1987、53頁。
- 4) 山口昌男『文化と両義性』、岩波書店、1975、90頁。
- 5) 地理学の立場から村落の空間構造を扱った研究には、山野正彦「丹波山地における村落の空間形態とその内部構造」、人文研究28-2、1976、23~53頁、平井松午「丹波高地東部における宮座と村落構造—京都府京北町矢代地区を例として—」、人文地理32-5、1980、23~43頁、八木康幸「近江湖南村落における宮座と象徴空間」、人文地理38-2、1986、27~50頁、島津俊之「村落空間の社会地理学的考察—大和高原北部・下狭川を例に—」、人文地理41-3、1989、1~21頁など、多数の先例がある。
- 6) 竹内俊則『昭和京都名所図会3 洛北』、駿々堂出版、1982、307頁。
- 7) 『日本歴史地名大系27 京都市の地名』、平凡社、1979、468頁。
- 8) 『角川地名大辞典26 京都府上』、角川書店、1982、556頁。
- 9) 「村落内部における社会諸集団の空間的、階層的配列形態」という意味で使用する。島津俊之「村落の空間的社会構造とその変容—京都府

- 宇治田原町禅定寺地区の事例一」、人文地理38-6、1986、62~78頁。
- 10) 聞き取りによると、昭和10年頃までは各イエのそばに墓があつたらしい。
  - 11) 中津川町、中畠町は厳島神社に、出谷町は惟喬神社にそれぞれ集められ、小宮サンと呼ばれている。
  - 12) 「村のまとまりは、ことに用水争論・林野争論などにおいて強烈に発揮された」木村礎『近世の村』、教育社、1980、148頁。
  - 13) 京都市歴史資料館蔵『洞谷寺中津川町共有文書』など。
  - 14) 『内閣文庫所蔵史籍叢書55天保郷帳（一）』、汲古書院、1984、2頁、『内閣文庫所蔵史籍叢書56天保郷帳（二）附元祿郷帳』、汲古書院、1984、376頁。
  - 15) 「小学区が、『基礎地域』相互の共属意識をつよめ、『基礎地域』の拡大に、実質的な影響をあたえた」水津一朗『新訂社会地理学の基本問題〈増補版〉』、大明堂、1980、139頁。
  - 16) 8月24日の夜、6メートル四方ほどのやぐらを山中に組み、これに松の葉をくくりつけて1つの文字の形にし、点火する火の祭り。五穀豊穣を祈って、愛宕神に神火を供するためと言われる。中畠町と中津川町で行われる。
  - 17) 鳥越皓之「部落・町内の境界（序）」、ソシオロジ21-2、1976、58~73頁。
  - 18) 小口千明「農村集落における精神的ムラ境の諸相—茨城県桜村における虫送りと道切りを事例として—」、城西人文研究12、1985、37~51頁。
  - 19) 八木康幸「村境の象徴論的意味」、人文論究34-3、1984、7頁。
  - 20) 八木康幸、注19)、11頁。
  - 21) 竹内利美「むしおくり」、（『日本社会民俗辞典4』、誠文堂新光社、1960、所収）、1429~1430頁。
  - 22) 柳田国男は、虫送りの際、虫を送る村はずれの場所を送り場と呼ぶことを指摘している。柳田国男「神送りと人形」、（柳田国男『定本柳田国男集13』、筑摩書房、1963、所収）、464頁。
  - 23) 雲ヶ畑では「送り場」の名称は使われていないが、ここでは一般名詞として使っておく。
  - 24) 旧京都府愛宕郡郡役所編『洛北誌旧京都府愛宕郡村志』、大学堂書店、1970、294頁。
  - 25) 雲ヶ畑の共有から昭和24年に京都市営火葬場となつた。昭和39年12月以後は全く使われず、昭和54年に閉鎖された。浅香勝輔、八木澤壮一『火葬場』、大明堂、1983、109~111頁。
  - 26) 「地蔵菩薩の石像を村境に祭ることも少なくない」原田敏明「村の境」、社会と伝承1-4、1957、24頁。
  - 27) 林 正巳「境の神々—境界の地理学研究(2)一」、新潟大学教育学部高田分校研究紀要17、1972、69頁。
  - 28) 千田 稔「古代日本における土地分類—「山口」という場所をめぐって—」、（石田寛教授退官記念事業会編『地域—その文化と自然』、福武書店、1982、所収）、613~621頁。
  - 29) 林 正巳、注27)、69~70頁。
  - 30) 山野正彦は「境の場所」の1つとして墓地をとらえ、考察を加えている。山野正彦「日常景観のなかの恐怖の場所—墓地と閻魔堂」、（石川・岩田・佐々木編『生と死の人類学』、講談社、1985、所収）、27~51頁。
  - 31) 『建築大辞典』、彰国社、1976、38頁。
  - 32) 八木の表現を借りるならば、前者は儀礼的空间秩序、後者は日常的空间秩序に関わる「境の場所」と言いかえることができよう。八木〔注5〕30~31頁]。
  - 33) トゥアン著、山本 浩訳『空間の経験—身体から都市へ』、筑摩書房、1988、8頁。